

平成二十六年度 入学試験問題

国語（理系）

100点満点

（配点は、学生募集要項に記載のとおり。）

（注意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は表紙のほかに10ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページある（うち7ページは下書き用）。

三、問題は全部で3題ある（1ページから10ページ）。

四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはつきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰つてもよいが、解答冊子は持ち帰つてはならない。

□ 次の文は、著者が一九四一年に滿州(現在の中国東北部)へ派遣され、四五年の日本の降伏後にソビエト連邦軍に抑留されたのち、四九年に重労働の判決を受けた前後を回想したものである。これを読んで、後の間に答えよ。(四〇点)

起訴と判決をはさむほよぶた月を、私は独房へ放置された。とだえては昂ぶる思郷の想いが、すがりつぶような望郷の願いに変つたのはこの期間である。朝夕の食事によってかるうじて区切られた一日のくり返しのなかで、私の追憶は一挙に遡行した。望郷の、その初めの段階に私はあつた。この時期には、故国から私が「恋われている」という感覚がたえまなく私にあつた。事実そのようにして、私たちは多くの人に別れを告げて來たのである。そのとき以来、別離の姿勢のままで、その人たちは私たちのなかにあざやかに立ちつづけた。化石した姿のままで。

弦にかかる矢があつてはならぬ。おそらく私たちはそのようにして断ち切られ、放たれたはずであった。私をそのときまでささえて來た、遠心と求心とのこのバランスをうたがいはじめたとき、いわば錯誤としての望郷が、私にはじまつたといつていい。弦こそ矢筈へかえるべきだという想いが、聞きわけのない怒りのように私にあつた。

この錯誤には、いわば故国とのあいだの〈取り引き〉がつねにともなつた。私は自分の罪状がとるにたちぬものであることをしいて前提し、やがては無力で平穏な一市民として生活することをくりかえし心に誓つた。事実私が一般捕虜とともにそれまですごして來た三年の歳月は(それは私にとって、事実上の未決期間であつた)、市井の片隅でひつそりといとなまれる、名もないぼんような生活がいかにかけがえのないものであるかを、私に思いしらせた。しかもこの〈取り引き〉の相手は、当面の身柄の管理者であるソビエト国家ではなく、あくまで日本……おそらくそれは、すでに存在しない、きのうまでの日本であつたのであろうが——でなければならなかつたのである。

私たちは故国と、どのようにしても結ばれてはならなかつた。しかもそれは、私たちの側からの希求であるとともに、〈向う側〉からの希求でなければならないと、かたく私は考えた。望郷が招く錯誤のみなもとは、そこにあつた。そして私が、そのように考えた時期は、海は二つの陸地のあいだで、ただ焦燥をたたえたままの、かと的な空間として私にあつた。

その空間をこえて「手縛られ」つつある自分を、なんとしてでも信じなければならなかつたのである。

告訴された以上、判決が行なわれるはずであつた。だが、いつそれが行なわれるかについてには、一切知らされなかつた。独房で判決を待つあいだの不安といらだちから、かろうじて私を救つたものはきが状態に近い空腹であつた。私の空想は、ただ食事によつて区切られていた。食事を終つた瞬間に、一切の関心はすでにつきの食事へ移つていた。そしてこの、^(カ)つきの食事)への期待があるかぎり、私たちは現実に絶望することもできないのである。私はよく、食事の直前に釈放するといわれたら、なんの未練もなく独房をとび出すだろうかと、大まじめで考えたことがある。

なん日かに一度、あたりがにわかにさわがしくなる。監視兵がいそがしく廊下を走りまわり、つきつきに独房のドアが開かれ、だれかの名前が呼ばれる。足おとは私のドアをそのまま通りすぎる。「このつぎだ。」私は寝台にねころがる。連れ去られた足音は、二度と同じ部屋に還つてはこない。そして、ふたたび終りのない倦怠と不安のなかで、きのうと寸分たがわぬ一日が始まる。どこかの独房で手拍子をうつ音が聞こえる。三・三・七拍子。日本人だという合図であり、それ以上の意味はない。

望郷とはついに植物の感情であろう。地におろされたのち、みずから自由において、一步を移ることをゆるされぬもの。海をわたることのない想念。私が陸へ近づきえぬとき、陸が、私に近づかなければならぬはずであつた。それが、棄民されたものへの責任である。このとき以来、私にとつて、外部とはすべて移動するものであり、私はただ私へ固定されるだけのものとなつた。

四月二十九日午後、私は独房から呼び出された。それぞれドアの前に立つたのは、いずれもおなじトラックで送られ、おなじ日に起訴された顔ぶれであつた。員数に達したとき、私たちは手をうしろに組まされ、私語を禁じられた。

私たちが誘導されたのは、窓ぎわに机がひとつ、その前に三列に椅子をならべただけの、およそ法廷のユーモアにふさわしい一室であつた。椅子にすわり、それが生涯の姿勢である」とく、私たちは待つた。ドアが開き、裁判長が入廷した。若い朝鮮人の通訳が一人(彼もまた起訴直前にあつた)。私たちは起立した。

初老の、実直そうなその保安大佐は、席に着くやすでに判決文を読みはじめていた。私が立った位置は最前列の中央、判決文は私の鼻先にあつた。ながながと読みあげられる、すでにおなじみの罪状に、私の関心はなかつた。全身を耳にして私が待つたのは、刑期である。早口に読み進む判決文がようやく終りに近づき、「罪状明白」という言葉に、重労働そして二十五年という言葉がつづいたとき、私は耳をうたがつた。ロシヤ語を知らぬ背後の同僚が、私の背をつついた。「何年か」という意味である。私は首を振つた。聞きちがいと思ったからである。

それから奇妙なことが起つた。読み終つた判決文を、おしつけるように通訳にわたした大佐は、椅子の上に置いてあつた網のようなものをわしづかみにすると、あたふたとドアを押しあけて出て行つた。大佐がそのときつかんだものを、私は最初から知つていた。買物袋である。おそらくその時刻に、必需品の配給が行なわれていたのである。この実直そうな大佐にとつて、私たち十数人に言いわたした二十五年という刑期よりも、その日の配給におくれることの方がはるかに痛切であつた。ソビエト国家の官僚機構の圧倒的な部分は、自己の言動の意味をほとんど理解する力のない、このような実直で、善良な人びとでささえられているのである。

つづいて日本語で判決が読みあげられたとき、私たちのあいだに起つた混乱^(工)ときようこう状態は、予想もしない異様なものであつた。判決を終つて^{*}（溜り）へ移されたとき、期せずして私たちのあいだから、悲鳴とも怒号ともつかぬ喚声がわきあがつた。私は頭から汗でびつしよりになつていて了。監視兵が走り寄る音が聞こえ、怒氣を含んだ顔がのぞいたが、「二十五年だ」というと、だまつてドアを閉めた。

故国へ手縛られつつあると信じた一條のものが、この瞬間にはつきり断ちきられたと私は感じた。それは、あきらかに肉体的な感覺であつた。このときから私は、およそいかなる精神的危機も、まず肉体的な苦痛によつて始まる^(工)ことを信ずるようになつた。「それは実感だ」というとき、そのもつとも重要な部分は、この肉体的な感覺に根ざしている。「手縛られている」とを、なんとしてでも信じようとしたとき、その一條のものは觀念であつた。断ち切られた瞬間にそれは、ありありと感覺できる物質に変貌し、たちまち消えた。觀念が喪失するときに限つて起るこの感覺への変貌を、そののちもう一度私は経験した。

観念や思想が〈肉体〉を獲得するのは、ただそれが喪失するときでしかないことの意味を、いまも私はたずねぬにいる。意味が与えられるとき、その実感がうしなわれることを、いまもおそれるからである。あつというまに遠のいて行くものを、私は手招いて追う思いであつた。

四月三十日朝、私たちはカラガンダ郊外の第二刑務所に徒步で送られた。刑務所は、私たちがいた捕虜収容所と十三分所のほぼ中間の位置にあつた。ふた月まえ、私が自撃したとおなじ状態で、ひとりずつ衛兵所を通つて構外へ出た。白く凍つていたはずの草原は、かがやくばかりの緑に変つっていた。五月をあすに待ちかねた乾いた風が、吹きつつかつ匂つた。そのときまで私は、ただ比喩としてしか、風を知らなかつた。だがこのとき、風はかんべきに私を比喩とした。このとき風は実体であり、私はただ、風がなにとかを語るための手段にすぎなかつたのである。

(石原吉郎「望郷と海」より)

注(*)

矢筈||矢の端の、弓の弦を受ける部分。

〈溜り〉||捕虜を収容している空間のことときます。

カラガンダ||中央アジア北部、カザフスタンの地名。当時はソビエト連邦に属していた。

問一 傍線部(ア)～(オ)のひらがなを漢字に改めよ。

問二 傍線部(1)はどういう意味か、説明せよ。

問三 傍線部(2)で、監視兵はなぜそのような態度をとつたのか、説明せよ。

問四 二重傍線部はどのようなことを言つているのか、説明せよ。

次の文を読んで、後の間に答えよ。(三〇点)

嵐にゆれ動いている木や、波立つてある海を見て、あの木のゆれ方はあまり良くないとか、波の形がなっていないとか批評する人はいない。同様に優れた作品は、作家の手つきが見えないままに、読者をのめり込ませる。傑作はつらなり合うものが動いて、吹く風に似た音をたてる。

創作という言い方があるが、作家は何もないところから何かを創り出すわけではない。自分の力で創り出すというよりは、思わず知らず、えたいの知れない方に押されてそうなってしまう時、その作品は比較的まともなものである。

また、べつの言い方をすれば、創作とは、何かを創り出すというよりは、そこにもともと埋まっているものを掘り出す作業なのだ。もともとそこには、いくら一生懸命掘つても突き当たらないし、下手な掘り方をすれば、像の形が欠けたり壊れたりすることもある。

つまり、自分の掘り当てたい像はどこに埋まっているか、また、どのような掘り方をすればよいのか、というようなことが、作家の作業なのだろう。

わたしはいつのころからか、文学は、生活の中にしか埋まつていないとと思うようになった。⁽¹⁾ 生活の中にかかる虹の橋づめに埋まっている金の壺がわたしの文学である。

恋人たちが輝く目とバラ色の頬でほほ笑むとき、彼らは虹の橋づめに立つてゐるのだし、うずくまつてすり泣く幼児の足の下にも金の壺は埋まつてゐる。怒る人、闘う人、不可思議な衝動にかられて立ちすくんでゐる人、そうした人の背後には必ず虹の橋がかかっている。

この人間社会で、言いたいことを言えずに、口ごもつて生きている人びとが、何かのときにふと洩らしてしまふ言葉は無数の水滴になり、太陽の光が当たると虹の橋になるのだ。

わたしは、生きているうちにめぐり会つた人びとの呟いた言葉を拾い上げて、小説を書いてゐるから、めぐり会つた人びとはわたしの文学世界を築いてくれた恩人である。作品は自分の力で創り出すわけではないとは、そういうことだ。

自分を文学の専門家だと思い込んでいる人たちの言葉は、ほとんど、わたしの心を打たない。文学に限らず、どんな道でも同じだと思うが、その道で一級の人たちは、自分をその道の専門家だとは思っていない。一級の人は、自分のやつていることを、自分の人生だと思い、話をするときは、自分の人生の話ををする。

彼は、彼のまわりにうごめいているものをじっと見つめ、「自然」の中にひそんでいるものを自分自身の中に見つけようとする。

(2) 芸術家は独創的であらねばならない、といった言い方があるが、これは浅薄に使われやすい言葉である。たとえば、昼間は眠つて、夜目ざめて仕事するのを独創的だと思つたりする。それはただ、珍しい習性が、なんらかの理由でつけられてしまつただけの話である。この習性をこつけいで悲劇的だと思うのは芸術家の感性だが、独創的だと思う人は、芸術家の素材となるに適した人である。

芸術家にはこの種の独創性は必要ではない。必要なのは「自然」が内包する生命である。そこにある生命を掘り出すのが芸術家で、芸術家は生命を無から創り出すわけではない。

わたしがまだ世間に作品を発表していないころ、そして、わたしが文学についてひと言も語らないころ、わたしを「自然」から何かを掘り出すことのできる人間として扱ってくれた二、三の友人がいたが、そういう人たちは真正の芸術家だった。つまり、彼らは、独自の作品世界ともいいうべきものを持っていた。「自然」を映した彼らの生活そのものが芸術品だった。

彼らの人生にまつわる独特的の表現の中には、それをそのままテープにとつておけば、立派な文学作品になるものがあった。そして、わたしは今でもそれらの話を思い出して、つづり合わせて小説を書いているに過ぎない。

作家として暮らし始めると、人びとの何げない言葉を聞く機会が少なくなつたような気もしている。

小説に書いてもらいたくてする人の話や、書かれまいとして用心している人の話は、あまり面白くないのが普通である。

そういう話には、吹く風の音がない。また見上げても、決して虹はかかるしない。もちろん、金の壺も埋まつていらない。

(大庭みな子「創作」)

問一 傍線部(1)はどうのよつた」とを言つてゐるのか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどうのよつた」とを言つてゐるのか、説明せよ。

問三 作者が本文中で用いる「自然」はどういうものか、芸術家との関係を踏まえ、説明せよ。

白

紙

三

次の甲と乙とは、猿丸大夫の歌「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」について書かれた文章である。これを読んで、後の間に答えよ。(三〇点)

甲

この鹿に心なほあり。春夏などの草木茂り、隠れ所の多き時は、野にも山にも里にも起き臥して己が栄華のままなり。秋暮れ、草木も枯れ行くまま、次第次第に山近く行くに、なほここも蔭なくなれば山の奥をたのみ入るに、また蔭なければ木の葉を踏み分け、露、時雨に濡れて鳴く鹿の心、おして知るべし。今はいづくに行きて身を隠す方あらんと衰れに聞こゆるなり。

(『百人一首聞書』より)

乙

この歌は、⁽²⁾秋のあはれも常の家に居てはさのみ悲しとは思はず、家を出でて奥山に分け入り、紅葉の落ち葉を踏み分け、いと哀れなる折しも、妻恋ふ鹿の声を聞く時こそ、はじめて秋の悲しさを知るとなり。総じて、うれしき事もかなしき事も、そ

(小倉無隣『牛の涎』より)

問一 傍線部(1)(2)の意味を記せ。

問二 この歌から一つの教訓を引き出している。それはどのような教訓か、説明せよ。

問三 甲と乙とでは、この歌について解釈の異なる点がいくつある。そのうち、最も大きな相違はどこにあるか、説明せよ。

正解は、このページで終わる。